それは素敵な休暇の過ごし方　～５日目～

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それは素敵な休暇の過ごし方　～５日目～

【Ｎコード】
Ｎ２７８３ＢＡ

【作者名】
阿佐木　零

【あらすじ】
ｐｉｘｉｖにて投稿した東方ｐｒｏｊｅｃｔ二次創作です。八雲家に居候している四季映姫だったが、半壊した自宅の状態を見に戻る。すると依頼していたのとはまるで違う形状の家が建てなおされており、主犯が誰かと問い正す。

前日までのあらすじ

まともな友人は親ばかだった。

□■

「今日はどうするんだい？」

朝。

朝食の用意をしていると、手伝ってくれている藍がそんな事を訊いてきた。

「ん～」

言ってしまえば、休暇中だ。用事なんて特に無い。

ただ、

「昨日は様子を見に行けなかったし、家を見てこようかなって思ってる」

「なるほど。そういえば昨日は私の用事を優先させてしまったんだったね」

少し申し訳なさそうに肩を落とした藍。

親ばかである事以外はまともで真面目なのだ。

「別に構わないわよ。もう休暇も半分を過ぎたしね」

「そうか……もうそんなに経つのか」

思い返してみれば、日が経つのがとても早く感じられた。
ただ単に与えられた休暇を消費しているだけだったら、こんなにも早い日々を感じる事は無かっただろう。

そういう意味では紫には感謝したいと思う。そこだけは。

「どうだい？　良い休暇になりそうかい？」

手を止めて、目を瞑りここ数日を思い返してみる。

――なんだ、答えは決まっているじゃないか。

「ええ、素敵な休暇になっているわ」

「それは良かった」

安心したのか、藍は笑みをこぼした。
私もつられるように笑みを浮かべ、そうして八雲家の朝が始まったのだ。

■□

2日ぶりに見に行ってみると、作業は予想以上に進んでいた。

「ふむ……」

河童たちが数人がかりで取り組んでいるようで、まさしくあっという間に進んでいくのが見ていてわかる。
さすが、幻想郷の趣味の妖怪。興味をひいたものがあれば力の入れようは段違いである。河童の科学は世界一。
ただ。

ただ――

「……何でこんな絢爛になってるわけ？」

私は上を見すぎて痛くなってきた視線を元に戻し、現場監督に直接問いを投げかけてみる。

「お疲れ様」

「こらー、そこは違う！　骨組みはもう何とか組立ててるんだから、さっさと次に移ってよ！　あ、お疲れ様です」

「え、ええ」

現場監督――河城にとりは煤けた顔に少しだけ疲労の色を浮かべていた。
そして照れくさいのか、僅かに頬を染めて頭をかきながら、

「いやー、張り切り過ぎちゃって」

私はもう一度、建築途中の自分の家に視線を戻す。

……うん。

「すぅ――」

「およ？」

「張り切りすぎなのよ！　何あれ何あれ何なのあれ！」

ビシッと自宅を指さして、

「誰が天を突く塔を建てろって言ったのよ！」

「いやぁ」

河童の仕事は完璧だった。

そう、完璧だったのだ。

まさか昨日見に来なかっただけで、最初は木造でちゃんと作っていたものが金属質な壁をした馬鹿でかい塔になっている光景以外は完璧だったのだ。

何これ、どう考えてもおかしい。

「……さすが、スイッチが入ったら凄まじいわね」

「いやぁ」

「褒めてないから。はぁ」

休暇は残り2日。それまでに仕上がらないと、私は帰る場所が無くなってしまう。

「とにかく、元に戻しておいて」

「え、いいんですか？」

「いいも何も」

意外そうな顔のにとりに言葉を続けようとしたら、

「だって、四季様がこうしてくれって言ったんじゃないんですか？」

「――ちょっと待って」

私が……？

「え、っと。昨日紫さんがここまで来て――」

「紫が？」

「はい。それで、こうこうこうしてくれって。で、とっても楽しそうだと思ってつい！」

「つい、じゃないでしょうに……」

それにしても紫が、ねぇ。

理由は何となく推測はつくけれど。

「……いつもの悪戯よね」

遥か高く聳えようとしている自宅（だった物）を見上げて独りご

ちる。

――心のどこかでは、きっとそうじゃないって思っている自分に気がつきながら。

□■

「ただいま」

「おかえり。早いね」

出迎えてくれた藍に、「まぁね」と返して椅子に座る。

「どうしたんだい？　少し固く見えるけど」

「そうかも」

藍はお茶を私のと自分のを入れ、対面に腰を下ろした。

「私で良かったら話を聞くよ？」

言って、湯のみを差し出してくれる。

この湯のみも、いつの間にか私専用になっていた。

「家がね」

藍の入れてくれた緑茶をすする。

温かいお茶が喉を通り抜け、身体を暖めてくれる。

そうして一呼吸置くと、幾分か落ち着きを取り戻せた気がする。

「ふむ、家が完成したのかい？」

「いえ」

さっき見た光景を思い出す。

うん、あれは――

「バベルの塔になってた」

「ぶーっ！」

「ちょ、こっちに吹きかけないでよ！」

「あ、ああ。すまない。少し驚いたもので」

ちょうどお茶を吹き出した藍は、自分のこぼした分を吹き終えてから、改めてお茶を入れ直して私の対面へと再び腰を下ろした。

「それで、家がバベルの塔になってらしいが……また河童の暴走かい？」

すました顔で言っているが、お茶を飲もうとしない辺り、まだ警戒しているようだ。

「映姫。君は滅多に冗談なんて言わない堅物だろうし、私もそれを重々承知しているからもう一度訊こうと思う」

何か失礼な事をさらりと言われた気がする。

「河童が暴走して、君の家を家どころじゃないシロモノに仕上げてしまったわけだね？」

「その通りよ」

私の肯定を聞いて、藍は一度お茶を飲んだ。

ふぅ、と一息をついてから、

「――原因は紫様だね？」

まるで最初からわかっていたかのように藍は言った。

驚いてその目を見てみると、藍はもう何か答えを知っているらしく、やがて笑みをこぼした。

「なるほどなるほど」

「藍？」

そして、腕を組んでひとりで「うんうん」と頷いている。

本当、何が何だか。

「映姫、今回ばかりは紫様を怒らないでくれないかな？」

「紫を？」

どうして。

「……映姫。君は聡明だ。少々頭が固い所もあるが、説教以外では

人を慮れる賢明な妖怪だ」
「やっぱり馬鹿にしてない？」
「本当は薄々気がついているんだろう？」
「……」
藍の問いに、私は椅子に深く背を預けた。
別にわかってなかったわけじゃない。
気がついてなかったわけでもない。
ただ――
「楽しい時間は、いつか終わるものだから」
「そうだね。その通りだ」
八雲紫は大妖怪だ。普段のちゃらんぽらんな様子からはわからない程の長い時を生き、力を持っている。
私よりもずっと。
だから、
「――まったく」
「答えは決まったのかい？」
「お陰様で。私は堅物で説教が大好きな妖怪ですから」

勘弁してくれ、と藍は困った顔で方を竦めてみせた。
本当、この友人はすました動作がいちいち様になる。

「なら、君に任せるよ」

「いいの？　貴方の御主人様の事でしょう？」

次に藍が何て答えるか、私にはわかっていた。
わかっていて訊いた。
さっきの藍が私にしたように。

「君と紫様の事だからね。大丈夫だと信じてるだけさ」

言って微笑んだ藍は、なるほど、確かに彼女は私の友人だと確信させてくれる程に澄み切った自信だった。
私はもう一度お茶を飲んで、思考を巡らせ始める。

あの我侭でお転婆で自分勝手で――でもどこか憎めない大切な妖怪の事を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2783ba/

それは素敵な休暇の過ごし方　～５日目～

2012年1月7日01時50分発行